

総会第二部・記念講演〈要旨〉

世界遺産と共に生きる町



直木賞作家・鎌倉ペンクラブ会長
早乙女貢さん

私が初めてヨーロッパに行ったのは1968年で2ヶ月あまり中近東から始めて南欧・北欧と廻りましたが、当時、中近東は戦争状態で写真撮影がうっかりできないし、ご存知のようにイスラムでは、魂を吸い取られるとあって、写真は拒否される。

そこで、スケッチならいいだろうと、絵を描いた。幼時から絵を描くのは好きでしたから、珍しい建物や遺跡、風景などを描く。それが、その後、外国旅行する度に、絵を描くきっかけになった。3年前に政経文化画人展で総理大臣賞を受賞し、小泉さんの賞状と賞杯を中曽根さんから手渡されたのも、「モロッコの市場」を描いたものです。その前に海部さんから文部大臣賞を貰いましたが、これは東欧のサラエボに近い「スタリ・モストの橋」で戦争の中心となった所。

どこの国でも、誰でも故郷や住んでいる所を愛するのは当然で、歴史や文化の伝統を尊重することで誇りも持てる。その愛郷心のない所には発展もないし無毛の砂漠になってしまいます。

私は満州生まれですが、先祖は会津です。戊辰戦争で、会津若松城(鶴ヶ城)はぼろぼろになった。

明治7年に政府の命令で取り壊されてしまったのですが、昭和40年再建された。この時、市民や有志者から寄付を募ったら、何と7千万円の予算の倍以上、1億5千万円が集まった。そこでホンモノの城の再建をしよう、と、エレベーターやエスカレーターなど作らず、すべてホンモノで再建、七層五階の若松城を再建し、お城ブームのきっかけとなった。この市民の情熱は、ほかで見かけることのあるペンキ塗りの白壁で

はない、ホンモノの漆喰で白壁を再現しました。夕陽、朝陽に輝く美しさは先祖が眺めたのと同じです。

ヨーロッパでも城の再建や修築が行われていますが、素晴らしいのはドイツです。連合軍によって徹底的に破壊されたお城や町並みを、昔通りに再建しようというのが、戦後、ドイツ人の考えたことでした。敗戦から立ち上がるには、観光しかない、というのも発想の一部だったかもしれませんが、それだけ、以前の町並み、自分たちの文化に対する絶対の認識と矜持があった。ドイツでは、破壊された家々の煉瓦をかき集めてつないだり、昔通りに窯で焼き、木骨の材質も檜など同じものを撰んで、昔どおりに作り上げた。象徴的なのが、古城街道やメルヘン街道、ロマンチック街道であり、街道の接点になっている古都ローテンブルグです。



「午前の静かなローテンブルク」1992年、油彩(10号)

日本の文化的発展の弱みはペーパーハウスと椰櫨される木の文化にあり、風化消滅が早い点にある。それは進歩を促すが又過去の遺産の原型的保存に欠ける憾みがある。それだけに、一層、大切に微細な点まで修復し後世に遺さなければならぬ。技術もだが何より市民の認識の問題だと思います。

私の描いた絵をご覧に入れるが、この一つは木骨の曲がった家。木骨の壁そのものも景観として優れているが、この木骨の強さは如何にもゲルマンの根性を象徴しています。また、ルーマニアのドラキュラ城として有名なブラン城は、チャウシスク夫妻銃殺の革命前に描いたものと現在の美々しく修復されたものでは、まるきり違う。大切にするというのは、お化粧とは違う。

歴史遺産はそこにこの国の文化が象徴されているからであり、それを守ってゆくことで日本の中世都市文化を象作った鎌倉の存在をアピールできるのではないか。